法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

「蝉しぐれ」に風景を読む

INOUE, Masahiko / 漆原, 和子 / 高花, 達也 / 高瀬, 伸悟 / 高木, 康平 / 野島, 祥代 / 宮崎, 眞実 / 井上, 昌彦 / 石塚, 健太 / URUSHIBARA-YOSHINO, Kazuko / TAKAHANA, Tatsuya / TAKASE, Shingo / TAKAGI, Kouhei / NOJIMA, Sachiyo / MIYAZAKI, Mami / ISHIDUKA, Kenta

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
39
(開始ページ / Start Page)
57
(終了ページ / End Page)
66
(発行年 / Year)
2007-03-22
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025940

〔法政地理
J. Geogr. Soc. Hosei Univ.
39, 57-66 (2007. 3)〕

「蝉しぐれ」に風景を読む

漆原和子・高花達也・高瀬伸悟・高木康平・野島祥代・宮崎眞実・井上昌彦・石塚健太

藤沢周平の小説「蝉しぐれ」の中に盛り込まれた自然描写から，地形や気候の再現が可能かどうかを検討し，小説で扱われた自然景観を復元することを研究目的とした．小説の中の自然描写から庄内平野にある山形県鶴岡市が舞台であると断定できた．小説の記述を確かめるために鶴岡での現地調査をおこない，その結果と地形図や地質図で庄内平野の特性を調べたところ，この平野部は向斜軸に相当し，沈降傾向にあることがわかった．また，日本海側にのびる幅の広い砂丘は，背斜軸があり隆起傾向にある地域である．その砂丘地の南の延長上にある弱線に沿った地域に温泉があることも確認できた．このような地形，地質上の特色は，鶴岡付近が洪水多発地域であることを示している．鶴岡は江戸時代においても洪水が多く，治水が必要な地域であることが浮かび上がった．普請組の河川管理の仕事を助左衛門と文四郎の職位として扱ったのは，登場人物達に現実性をもたせる点で重要であることがわかった．藤沢周平のこの小説における優れた自然描写は，小説の中から自然景観の復元を可能にし，かつ，その景観が実在する鶴岡とその周辺部と合致するものであることが確認できた．

キーワード：洪水，地質構造，砂丘，庄内平野
Key words：flood, geological structure, sand dune, Shonai alluvial plain

I　はじめに

藤沢周平作品には風景描写の優れた作品が多い．中でも「蝉しぐれ」は，季節感溢れる城下町とその周辺の自然描写が描かれている．この作品を読みながら，地形や気候を再現することが可能かどうかを試してみたいと考え，法政大学文学部地理学科3～4年生の参加する2006年度前期の「自然地理学演習III」で授業のテーマとしてとり上げた．後期には3年生の現地調査の結果にもとづいて，3年生が主としてこの論文をまとめた．「蝉しぐれ」の章ごとに記載されている文章から事象をプロットし，地図を作ることを目的に作業を始めた．同時に文献を調べるうちに，井上ひさしが文藝春秋(1994)や，山形新聞社(2002)で既に地図を描いていることを知った．また2005年10月に「トランヴェール」(JR東日本企画　トランヴェール編集部)に，2006年10月には「太陽」(別冊太陽編集部)に「蝉しぐれ」がとりあげられた．2006年11月に特に藤沢作品の「蝉しぐれ」に焦点を絞って，鶴岡の紹介や小説のイメージを紹介する写真の特集を組んだ「朝日ビジュアルシリーズ週刊藤沢周平の世界」が朝日新聞社から発刊されたので，それも参考にした．このように「蝉しぐれ」は多くの文献や雑誌で特集が組まれており，海坂藩は鶴岡市であるということは既に述べられているが，鶴岡市以外にこの自然描写にあてはまる場所はないのかを検証した．また，江戸時代の交通手段である徒歩と馬による人々の移動距離と移動時間の算出をし，この描写にあてはまる場所の特定を試みた．文学を味わうという観点からは程遠く，むしろ叙情的作品から自然地理的事象を読み解くという作者が意図しなかった読み方をしているのかもしれない．しかし，この作品は自然描写が優れており，文学作品でありながら文章中に十分に自然地理的事象を系として結びつけることができる材料が盛り込まれていた．

自然地理学演習IIIのゼミでの検討結果を記録にとどめておきたいと考え，この論文にまとめた．小説の記述から，自然景観の復元をすることを一つの試みとしておこなった結果である．

第１表　小説に書かれた気候に関する記述

頁	行	小説の中の記述	読み取れる事実
61	9～	灰いろの雲は、時どきその重さに堪えかねたように垂れ下がり、そこからつめたいみぞれや乾いた霰を降らせるのだった。雪は例年よりも遅れていた。	毎年降雪のある地域
159	7	そしてあっという間に冬が来て、例年より雪の多い長い冬が過ぎた三月の始めに、	
89	2	梅雨が終わって暑い夏が来た。	梅雨がある
315	12	花の香がにおう四月半ば～	開花の時期が遅い
325	3～	(P315「四月半ば」から)半月ほどたって非番の日が来たとき、～田植えも全部終ったわけではなかった。	5月にまだ田植えをしている
332	18	穂がいろづきはじめたころ、一夜領内を大風が吹き抜けて稲が倒れた。	台風と思われる風

第２表　小説に書かれた地形に関する記述

頁	行	小説の中の記述	読み取れる事実
9	6	蛇行しながら北東にむかう。	北東流河川を有する平野
23	10	江戸は海坂藩城下から百二十里のかなたにある町である。	海坂藩のおおよその位置
62	1	領国の三方を取りかこむ山々は雪をかぶって七合目まで白くなっている。	三方を山に囲まれている地形
131	10～	毎朝浜で上がる魚を城まで急送するのが仕事の、	海からさほど遠くない位置
456	16～	なだらかに起伏する砂丘に入った。そして冬の強い海風のために幹が斜めに傾いている黒松の林を抜けると、	海辺に砂丘地がある
456	19～	箕浦は小さな港を持つ漁師村だが、それよりも村はずれに十軒ほどの湯宿で知られている村である。	海岸に温泉宿がある

Ⅱ　調査方法

「蝉しぐれ」（文春文庫）（2005）の47刷版を用いて，小説の舞台となっている地域を特定し，小説で描かれた風景を地図として復元する作業をおこなった．また，地域の大地形や気候などの記述から，モデルとなった場所が鶴岡であることを特定した．さらに，詳細な考察をする材料として，現地調査をおこない，文献，資料などの収集をし，作品の中の自然描写が合致することを確認した．その上で，小説から読み取り，作成した地図を検証した．小説に記述された地表の地形配列の条件を満たす地下構造のモデルを，庄内平野の地質図や参考文献をもとに作成した．

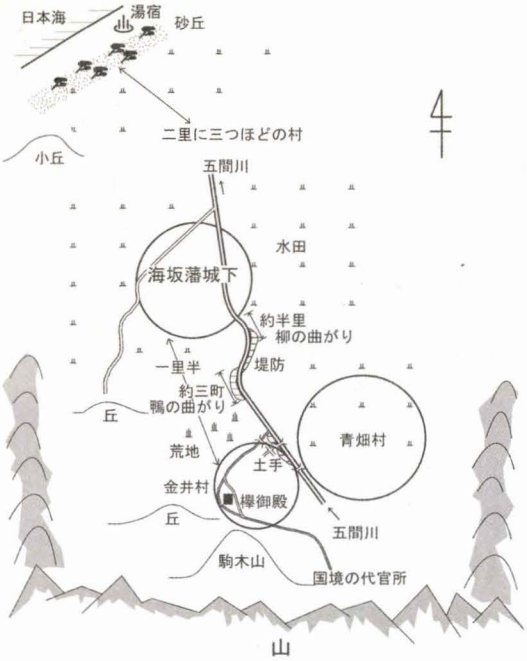
Ⅲ　海坂藩の特定と地図化

1．海坂藩の位置の特定

「蝉しぐれ」の舞台となった場所を特定するために，作品中の大地形，小地形や気候などの自然描写の記述から，地域の特定を試みた．また，本文に記述されたものの中から，位置を特定するために用いた表現を表にまとめた．気候に関する記述をまとめたものが第1表である．地形に関する記述をまとめたものが第2表である．この二つの表をもとに，海坂藩の特定を以下のようにおこなった．

まず，気候に関する記述の中で，4月半ばに桜の季節が訪れることや，田植えの最盛期が5月ということから，東北地方の北部か北海道南部ということが特定できる．しかし，この小説の舞台は江戸時代であり，小氷期であることを考えあわせると，北海道南部ではないだろうと想定できる．さらに，梅雨があるという記述から東北地方北部であり，北海道南部ではないことが特定できる．

次に，地形に関する記述をまとめた第2表にもとづいて，さらに海坂藩の位置の確認をすすめた．城下の南西にある丘から北東に向かい小川が流れ下り，五間川に合流するという情景描写で，この物語は始まっている．このことから，小説の



第１図　「蝉しぐれ」の舞台となった景観

要所に何度も登場する五間川が北流していることを読み取ることができる．次に，「江戸は海坂藩城下から百二十里のかなたにある町である．」という記述から，百二十里は480kmに相当するため，東北地方の北部となる．ただし，江戸から街道筋で480km北とすると太平洋側では北上川流域になり，川が北流するという記述と符合しない．したがって日本海側の東北地方北部と限定することができる．

次に地形に関する描写で，「領国の三方を取りかこむ山々」とある．日本海側の東北地方で，かつ，三方を山々に囲まれる平野部という条件を満たす平野は，秋田平野，庄内平野，新潟平野の3平野となる．この3平野のうち，砂丘が日本海側にあり，海岸沿いに温泉があるのは新潟平野と庄内平野である．このことと，川が北流する条件をあわせて満たす平野は庄内平野のみである．さらに庄内平野には鶴岡と酒田の二つの城下町があるが，酒田は川が南流する点と，浜までの距離が近すぎる点で符合しない．したがって，海坂藩は鶴岡であるということを特定した．

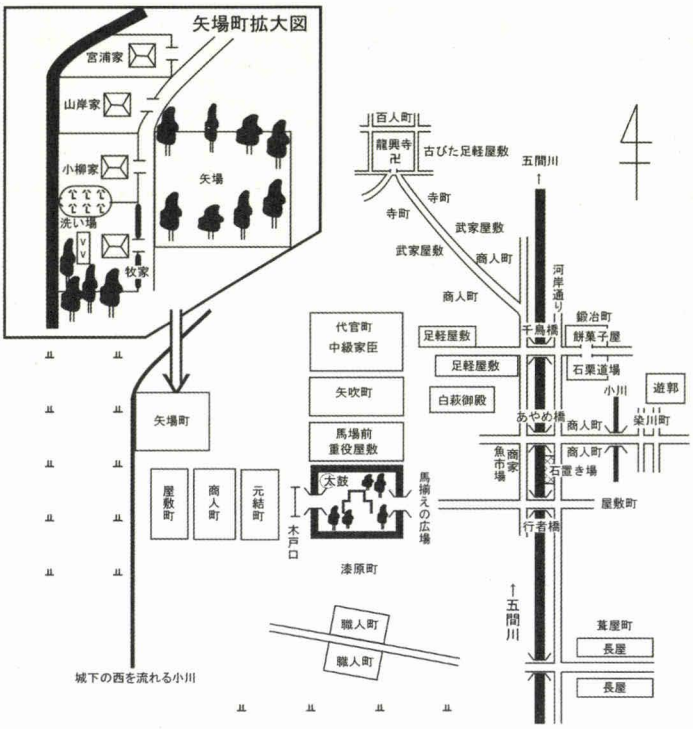
写真１　「鴨の曲がり」の舞台となった大きく蛇行する内川小真木原町付近

2. 海坂藩の地図化

本文に記載された風景描写と記述されている事象を，地図化する作業をおこなった．まず，本文の記述のみで位置を確定できる事柄を規模の違いから大地形図（第1図）と市街図（第2図）にわけ，略図を作成した．

大地形図では，海坂藩が三方を山に囲まれ，平野部を流れる五間川と城下の西部を流れる小川に囲まれている様子を描いた．小川は第2図で示すように文四郎の住む組屋敷の裏手を流れる小川のことで，この小川は城下の南西に位置する丘から城下に向かい，蛇行しながら海坂藩城下に流下する．さらに北東へと流れを変え，五間川と合流して日本海へと流出している．五間川もまた，蛇行しながら城下の平野部を流れる河川である．

本文中に記載されている事象から，舞台となっている景観を拾い上げると次のようである．「柳の曲がり」と「鴨の曲がり」は，五間川が蛇行して流路を変えている地点である．「鴨の曲がり」付近の現在の風景は，写真1に示した．洪水被害に悩まされていた海坂藩では，この五間川に堤防を築き，対策を立てている．だが，平野部で水が得やすいことが稲作においては好条件となり，海坂藩の周囲は水田に囲まれている．この平野部は，欅御殿のある金井村付近まで続いている．五間川の緩やかな流れは下流では幅十間を超え，砂州を形成する．しかし，上流部の金井村付近ではまだ河川の幅は狭い．金井村は城下から上流へ約6kmに



第２図　海坂藩の城下の町名と文四郎の青年時代の住居周辺図

位置しており，丘の麓にある．この付近は，欅などの木立が広がっている．

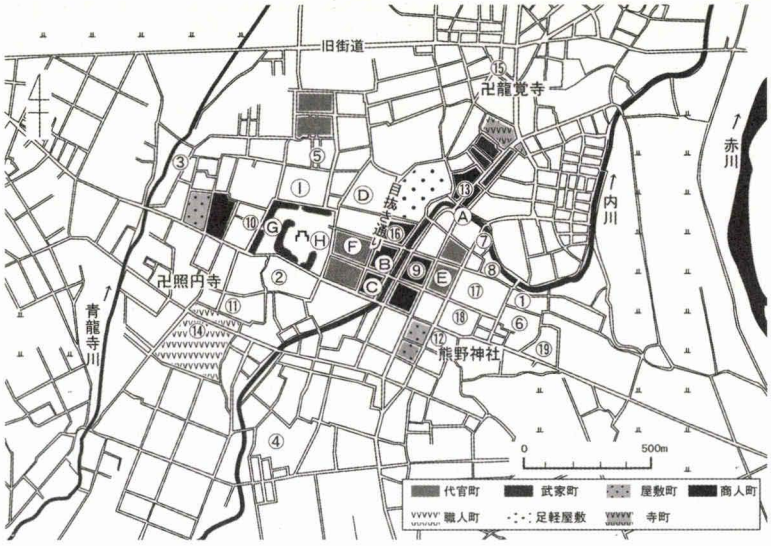
第1図の北部の海岸付近は，砂丘が複数の列をなし，小説の中では砂丘上に日本海側からの強風によって偏形したクロマツの林がある．この林を抜けると漁師村の箕浦があり，ここには湯宿があると設定されている．

次に海坂藩市街図を作成した(第2図)．この図には，小説から読み取れる記述から，位置の確定ができる町名や建物を地図化した．城下を流れる2本の河川については，その位置から内川が小説の中の五間川にあたり，青龍寺川が城下の西を流れる小川に相当すると考えた．海坂藩城下町の規模に関しては，鶴岡市史編纂委員会(1964，1965)で，寺町が軍事的にも防御の役割を果たすように配置されていると述べていることや，1916年発行の5万分の1地形図「鶴岡」を参考に決定した．

次に，「城下町鶴岡」(大瀬，1985)の地図を元図として用い，第2図の海坂藩の市街図を実際の市街図にあてはめてプロットしなおしたのが第3図である．小説の中の町名は，実在する町名を使用しているものと，町の機能を町の呼び名として呼んでいるものがある．ただし，実在する町名は，町名を使用しているが，実際の位置とは異なることが多い．第3図では，前者を番号で表し，後者を濃淡や斜線を用いて表し，その違いを表現した．市街図作成にあたって，小説の中の用いた事象を第3表に示した．なお，小説に町名が出てきていても位置の特定ができないものは，地図上にプロットせずに除外した．

Ⅳ　庄内平野の地形の特色

庄内平野の記述に「水田が広がる，山の麓に集落がある，五間川は洪水を起こす」という平野の地形全体に及ぶ記述がみられた．現地調査の結果，鶴岡のある庄内平野南部は，きわめて平坦で非常に起伏の少ない地域であった．そこで，5万



第3図 「蝉しぐれ」から推定した海坂藩城下を現在の鶴岡市の地図上に示した図
(町名：1与力町，2内匠町，3矢場町，4葺屋町，5山吹町，6天神町，7染川町，8小舟町，9吉住町，10元結町，11漆原町，12神明町，13鍛冶町，14新鍛治町，15百人町，16青柳町，17鷹匠町，18染物町，19曲師町，建造物と場所の名前：A千鳥橋，Bあやめ橋，C行者橋，D白萩御殿，E杉ノ森御殿，F横山屋敷，G三ノ丸，H馬揃えの広場，I馬場前)

分の1地形図「鶴岡」から河川の平均勾配を求めてみると，赤川は17/10,000で内川は5/10,000ときわめてゆるい傾斜となっていた．日本の多くの平野は，山地から平野部にかけての河川の傾斜が急変するに伴い，平野への移行点で必ず扇状地が形成されるのが一般的であるが，鶴岡付近の山麓部にはこのような特色はみられなかった．写真2には庄内平野南部，井岡付近の山麓部の様子を示した．山麓には残丘状の丘陵か山脚が，平坦な平野と明瞭な境界をなして接する．また，海岸部では幅約3kmにも及ぶ広い海岸砂丘が存在している．これらの特徴を地形図で確認した(第4図，第5図)．

5万分の1地形図「湯殿山」「酒田」「鶴岡」と地質図(土谷ほか，1984)を参考に庄内平野の鶴岡付近の地形を考えると，1)山地から平野に急変する，2)平野に起伏がほとんどなく平坦である，3)河川は北側へ流下する，4)日本海側の河口に近い位置には幅の広い砂丘があることが特色であることがわかった．これらのことから，平野部は沈降傾向であり，砂丘は隆起傾向にある地域であることが推定できる．さらに，5万分の1地質図「鶴岡」を参考

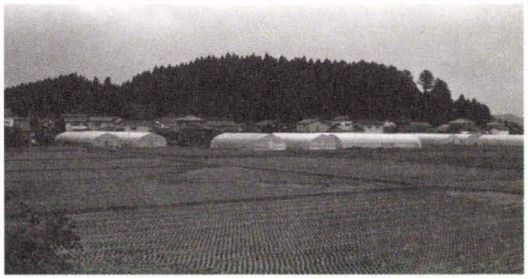


写真2 庄内平野南部井岡付近の丘陵地と，扇状地の発達しない平坦な平野．水田の下部には泥炭地が発達する．

に庄内平野の特色をみると，以下のようである(第6図)．

i)日本海側の砂丘地はその南にある山地の背斜構造の延長線上にあり，鶴岡城下の平野部には向斜軸があり，平野は沈降傾向にある．

ii)平野の東側の山地には断層が複数走っていて，山地は断層の上盤側に相当する．したがって，東側の山地は隆起域である．

iii)砂丘地の日本海側には温泉が分布する．温泉

第３表　小説に書かれた城下町に関する記述

小説の中に書かれている町名など	記述箇所
矢場町　普請組組屋敷	P.9:L2～6 P.12:L7～8 P.14:L8 P.27:L13 P.47:L1 P.77:L16～17 P.92:L1～2
青柳町　居駒塾　小野道場	P.15:L11 P.85:L8～9 P.351:L6～7 P.437:L11 P.445:L15
鍛冶町　石栗道場	P.15:L11 P.19:L12 P.72:L5～6 P.198:L1 P.445:L15
あやめ橋	P.22:L5
対岸の商家と魚市場	P.22:L8～9
行者橋	P.28:L5
行者橋つきあたりの屋敷町	P.28:L7
神明町　熊野神社	P.33:L8 P.256:L13
白萩御殿	P.34:L7 P.69:L7
目抜き通り	P.34:L12 P.198:L1
餅菓子屋	P.35:L19～P.36:L1
吉住町	P.37:L18～19 P.42:L12～13
三の丸　郡代屋敷	P.51:L3 P.53:L18～19
屋敷町，無人の商人町	P.53:L15～16
元結町　木戸口	P.53:L18
与力町	P.54:L7
天神町	P.54:L7
曲師町	P.54:L7
鷹匠町　服部の家	P.54:L7 P.99:L9～10 P.166:L4～5 P.172:L9～10
染物町　与之助の家	P.54:L8 P.301:L10～12
馬揃えの広場	P.55:L17
漆原町　逸平の家	P.66:L7 P.68:L9 P.77:L16～17
山吹町	P.69:L7 P.70:L3～4 P.85:L8～9
小舟町	P.69:L16
千鳥橋	P.72:L5～6
照円寺	P.78:L1～2 P.250:L3 P.260:L3
内匠町　拝領屋敷	P.91:L11～12
百人町　龍興寺　旧街道	P.103:L11 P.110:L12～13 P.111:L2～5 P.112:L2～3 P.119:L9～12
龍興寺→組屋敷	P.123:L10 L15 P.124:L14～16 P.125:L6 P.126:L17
葺屋町	P.128:L1～2 L19 P.144:L9～12 P.206:L4～5
組屋敷→葺屋町	P.129:L10～11 P.130:L16～18
新鍛冶町	P.144:L7～8
馬場前　家老屋敷	P.166:L4～5 P.421:L9～10
染川町	P.238:L12～13 P.14～16
杉ノ森御殿	P.280:L9 P.281:L8 P.415:L8 P.421:L9～10
新たに引っ越した家	P.292:L5 P.301:L11～15
横山屋敷	P.91:L11～12 P.413:L19～P.414:L1 P.414:L4 L7～11 P.452:L3
あやめ橋から二つ目の下流の橋	P.414:L15

の湧出位置は断層線や弱線と関連していると思われる．

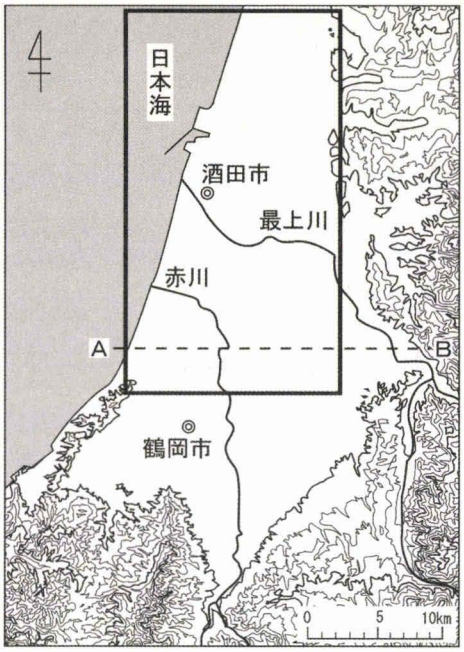
さらに，庄内平野の地形発達を研究した有賀(1984)は，次のように古環境とその年代を明らかにしている．

ⅰ)12,000～11,000yB.P.，海水準が－50mに達した．当時の海岸線は現在よりも沖に位置し，その当時の酒田付近には潟湖が広がっていた．

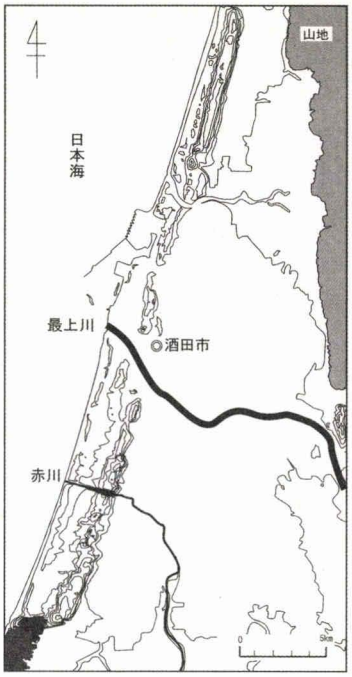
ⅱ)9,000～8,000yB.P.，海水準が－20mに達すると，吹浦付近や大山，藤島，鶴岡の北部にも潟湖が拡大した．

ⅲ) 8,000～7,000yB.P.，海水準が－15mに達した．この頃潟湖はさらに拡大し，その海岸線のおよその位置は，鶴岡北西部では少なくとも15～16km内陸側にあった．

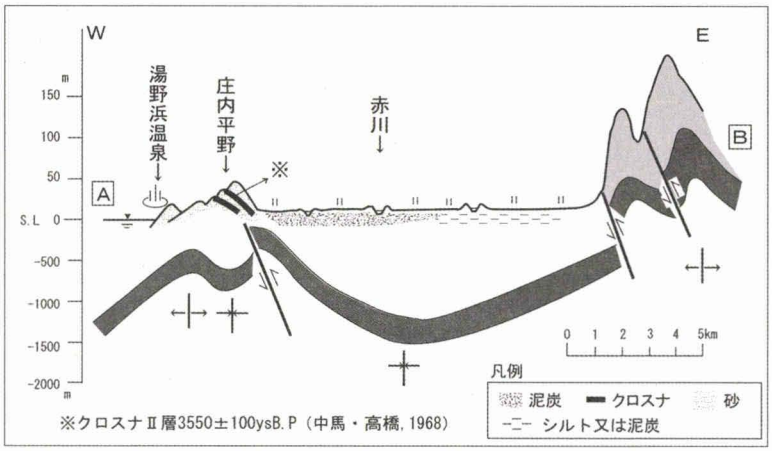
ⅳ) 7,000～5,000yB.P.，海水準が－10m付近にな



第４図　５万分の１地形図（2000）から作成した地形概略図



第５図　第４図の赤川下流域の拡大図



第６図　第４図中のＡ－Ｂ基線に沿った地質断面モデル図

ると，内陸側に移動してきた砂州が，現在の海岸線付近に到達した．砂州の内陸にあった潟湖はこの頃から縮小しはじめたが，鶴岡北西部には遅くまで潟湖が残った．

また，庄内砂丘について角田(1975)を簡略化して紹介すると以下のとおりである．

ⅰ)砂丘中にはクロスナⅠ層，クロスナⅡ層，クロスナⅢ層のクロスナ層がある．

ⅱ)層内の炭質物や土器片，石器類から，クロスナⅡ層の形成年代は約3,500年から1,300～1,400年

第4表　小説に書かれた洪水に関する記述

頁	行	小説の中の記述
47	1 −	第2章全体が台風の記述となっている。
198	5	近ごろはるかな川上の山にしきりに低い雲がかかるのが見え、多分そのせいで、二、三日前から川の水がふえつづけていた。
301	10 −	島崎与之助の家は、五間川が増水するとじきに水が出る染川町にあり、文四郎が住む組屋敷は檜物町の裏手にある。
430	8 −	その秋はくまなく領内の河川を回って、水流の変化、土手の崩れなどを調べ、記録するのが文四郎の仕事となった。はげしい風雨で土手が崩れたと聞いて、数里の道を馬で駆けつけることもあったし、また時には人の姿も稀な水源までさかのぼって、谷川の土砂の堆積を調べることもあった。
	16 −	領内の河川を見回る仕事は、田畑を回る仕事よりも緊張を強いられた。検分は村役人と一緒にすることが多かったが、わずかな見のがしが河川の氾濫につながったりする恐れがあるからである。

前である.

iii）17世紀には既に砂丘の形成期になっていたことからクロスナⅢ層はそれ以前であり，少なくとも砂丘の固定期は17世紀以前である.

以上のようにすでに庄内平野の完新世における古環境が明らかになっている.

V　庄内平野の洪水

「蝉しぐれ」の中の洪水に関する記述では，海坂藩の城下で洪水が懸念され，五間川の上流の堤防を破堤するという大事件があった．その際文四郎の父助左衛門の発案で破堤場所の変更をし，文四郎がそのことで父を尊敬するという場面の設定がある．このように，小説の中で洪水は，話の展開に大きく関っている．そこで，第4表に小説の中に記述されている詳細な河川の内容をまとめた．第2章の増水は秋が深まった季節の嵐の際発生し，強風を伴ったものであるとの記述があることから，台風によるものと推定できる．さらに第2章の中には，雨が降ると濠の水が橋桁にまで届きそうになること，五間川が増水することなどの描写がある．また，「出水を放置しておくと城下の半分が水浸しになり，それを防ぐためにはこれまでどおり五間川の上流で堤を切るしかない」という記述から，小説の中では五間川の堤を切らなければいけない状態が，過去にもあったことがわかる．さらに文四郎が働く普請組の仕事の中で，城の鐘が一定の回数鳴らされると，出水の合図となることが決められていたり，河川の見回りが重要であることなど，川の増水状態が人々の生活に大きな影響をもたらしていたことが読み取れる．そこで，江戸時代の庄内平野の洪水について文献を調べた.

鶴岡市史編纂委員会(1964)が調べた結果を第5表にまとめた．その結果，内川と赤川は頻度高く大洪水を起こす川であることがわかり，天保4年には鶴岡市街が湖のようになった．したがって，「蝉しぐれ」の中で洪水をこの地域の大事件として扱ったことは，海坂藩のモデルは鶴岡であり，普請組という職を助左衛門や文四郎の職位としていることは，読者に一層の現実感を植え付ける効果をあげている．そして，洪水がこの小説の重要なテーマであることは，庄内平野の特性を余すところなく用いているといってよいであろう.

第5表は鶴岡市史編纂委員会(1964)に記述された洪水に関することのみをまとめたものであるが，鶴岡では江戸時代に何回もの洪水が確認されている．その発生月日は，6月，7月が多く，梅雨前線の影響が大であることがわかる．さらに，1802年3月に赤川の土手が決壊しているのは融雪水の影響が考えられる．また，鶴岡市史編纂委員会(1964)には，「市内を流れる内川(江戸時代初期の河川改修工事以前の赤川本流)の赤川への落ち口(合流点)が，当時の大宝寺松原を出ると間もない場所にあったため，赤川が増水すると堤防が破れなくても内川の排水が悪くなり，洪水を起こした．時には逆水が赤川から内川に押し入り，鶴岡市内が滞水の場所にもなった.」と，記述されており，洪水が起こる原因は，単に降水量の増加と直

接関連しているのではないことがわかった.

「復元大系日本の城1」(坪井ほか, 1993)によると, 鶴岡の歴史は天正11 (1583)年に上杉氏が領地とし, 大宝寺城(現鶴ヶ岡城)を築いたことから始まるが, これらの洪水を防ぐために赤川の治水工事をおこなったのが, 慶長6 (1601)年に大宝寺城へ入封した最上義光(よしあき)であるという. 義光は, 大宝寺城を鶴ヶ岡城と改めて隠居所とし, 城下町を整備するだけでなく, 鶴岡を洪水の被害から防ぐために, 市内を蛇行しながら流れる旧赤川の流路を変える付け替え工事もおこなった. その付け替え工事に関しては, 鶴岡市史(鶴岡市史編纂委員会, 1964)に詳細な記述がある. それには,「市内を蛇行しながら流れる旧赤川を, 熊出(現朝日村)から東に流し, さらに下流の屈曲を減らして流れを早くさせるために, 赤川への落とし口(合流点)をさらに下流に下げて逆流を防いだ. 同じ頃, 水田に水を引く灌漑用水として青龍寺川も造られた. 内川と青龍寺川は共に赤川の支流であるため, 赤川の水源の山々に大雨が降り, 熊出の大水門が破れると, 内川が溢れて城下町が水浸しになったこともあった.」とある. しかし, 最上義光がこれらの赤川の治水工事をおこなったことによって, 鶴岡の町は洪水の被害を最小限にとどめ, 発達していったのである.

第5表　鶴岡に関する洪水史

年　号	西　暦	日　付	洪水の記録
寛文3	1663	7月11日	城下の3分の2が浸水。
〃 4	1664	7月11日	内川の五つの橋が落ちる。
延宝2	1674	7月 4日	牢屋が浸水。
宝永4	1707	6月14日	庄内大洪水。
享保8	1723	6月 1日	鳥居川原と紙漉町が浸水。
〃 14	1729	8月10日	筏橋が流される。
延享元	1744	7月12日	家二軒が流される。
宝暦3	1753	7月16日	厩が浸水。
文化5	1808	3月23日	赤川の土手決壊、苗津付近浸水。
文政5	1822	7月 3日	七日町橋と筏橋が流される。
〃 10	1827	7月 7日	上肴町が浸水。
〃 11	1828	7月10日	洪水あり。詳細不明。
天保4	1833	6月26日	鶴岡全体が湖のようになる。
〃 10	1839	6月28日	洪水あり。詳細不明。
万延元	1860	12月27日	三の丸が浸水、一日市町は船で通行。

(鶴岡市編纂委員会, 1964を簡略化)

庄内平野の海岸には幅広い砂丘地帯がある. この砂丘と洪水の関係については貝塚ほか(2005)に記述がある. それによると,「赤川は, 漂砂や飛砂によって河口がしばしば遮られたため, かっては砂丘の裾を北上し, 最上川と合流して日本海へ注いでいた. 冬季に河口が遮られることは, 春先に融雪洪水を起こす原因のひとつになっていた. 庄内平野の排水状況を改善させて洪水を解消するために, 1972年に砂丘を横断する放水路を造り, 赤川の流路を変える工事が行われた.」とある. したがって, 今日では大洪水の発生は回避されているといえる.

Ⅵ　まとめ

小説の中に題材として扱われている事柄は, 鶴岡とその周辺部の実際の自然特性や自然景観を良くあらわしていることがわかった. この小説を題材に考察したことをまとめると以下のとおりである.

ⅰ)鶴岡のある庄内平野は, 向斜と背斜が連続し, 数本の逆断層を持つ. そのため, 扇状地がほとんど発達しない平坦な平野であるという地下構造を持っている.

ⅱ)ⅰ)の特性を持つ平野は傾斜がきわめてゆるく, 河川は大きく蛇行し, 洪水が起こりやすい. そのため, 治水をすることによって街が発達していった. このことが小説の背景として取り扱われているために, 主人公が現実性をもってくる.

ⅲ)江戸時代の鶴岡の地形特性, 気候特性, 自然災害上の特性を文四郎の成長過程の背景として用い, 忠実に再現しているために, 読者が江戸時代の生活を疑似体験できるという効果を発揮している.

ⅳ)藤沢周平は「蝉しぐれ」の舞台である海坂藩を, 単に架空の城下町として描いているのではなく, 実際の鶴岡の気候や地形, 歴史などを踏まえて執筆したことがわかった.

これらのことが,「蝉しぐれ」の物語に, 鶴岡の歴史に実際にあったのではないかと思わせるほど

の現実性をもたせており，多くの読者を惹きつけている要因なのではないかと思われる．

謝　辞

2006年度後期のゼミ公開で見学に来てくださった法政大学国際文化学部の高柳俊男先生と同文学部史学科の小倉淳一先生には，それぞれの専門分野の視点を踏まえて，助言をいただけた．

前期授業に参加し，分担して講読した4年生は，後期は卒業論文作成のために現地調査には参加しなかったが，3年生の論文作成にあたって多くの意見をいただいた．さらに，現地調査にも同行し，大嵐の2日間をこの作品の範囲を見てまわった院生乙幡康之君に感謝したい．そして，観光案内所，丙申堂，致道館の案内の方々には，種々の土地の生活などを教えていただいた．以上の方々に記してお礼を申し上げます．

参考文献

朝日新聞社(2006)：朝日ビジュアルシリーズ週刊藤沢周平の世界1蝉しぐれ．朝日新聞社，43p.

有賀友子(1984)：庄内平野の地形発達―更新世末期以降の砂礫分布範囲の変化―．東北地理，36，13－24.

大瀬欽哉(1985)：城下町鶴岡．庄内歴史調査会，84p.

貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・崎晴雄・鈴木毅彦編(2005)：日本の地形3　東北．東京大学出版会，376p.

JR東日本企画　トランヴェール編集部(2005)：トランヴェール　特集藤沢周平『蝉しぐれを旅する』10．東日本旅客鉄道株式会社，45p.

角田清美(1975)：日本海および東シナ海沿岸の主な海岸砂丘地帯の形成期と固定期について．第四紀研究，14 (4)，251－276.

中馬教充・高橋一(1968)：山形県庄内砂丘の古砂丘の絶対年代―日本の第四紀層のC－14年代XL．地球科学，22，42p.

土谷信之・大沢穠・池辺穣(1984)：鶴岡の地質　地域地質研究報告(5万分の1図幅)．地質調査所，77p.

坪井清足・吉田靖・平井聖(1993)：復元大系，日本の城1北海道・東北(宮城県・山形県・福島県・秋田県・岩手県・青森県・北海道)．株式会社ぎょうせい，179p.

鶴岡市史編纂委員会編(1964)：鶴岡市史上巻．鶴岡市役所，851p.

鶴岡市史編纂委員会編(1965)：鶴岡市史下巻．鶴岡市役所，957p.

文藝春秋編(1994)：藤沢周平の世界．文藝春秋，301p.

別冊太陽編集部編(2006)：藤沢周平．平凡社，176p

山形新聞社編(2002)：藤沢周平が愛した風景．祥伝社黄金文庫，217p.